



リュッセルでビ・バップの始祖、ディジー・ガレスピーと共演して素晴らしいプレイを聴かせて間もなく、同年5月に脳溢血で世を去っている。まだ43歳という若さだった。

大なる遺産

ジャンゴ・ラインハルトの残した音楽は、他に先例を見ない、ギターによるスウィング・ジャズであったことはもちろんだが、彼の体内に流れるジブシーの血が大きく作用した音楽であったことも間違いない。時として滝のように溢れ出すフレーズには、フラメンコなどの伝統的なジブシー音楽に共通する激情がスウィングに転化した形跡が確かにある。通常アコーディオンで演奏される、フランス独特のミュゼット・ワルツの大衆的なエレガンスも盛り込まれている。そうしたフォークロアな要素を内包する一方、ジャンゴが演奏したのは時代の音楽、スウィングであり、そのイデオロムと折り合いをつけながら、脳目も振らず、自由にインプロヴァイズしてみせた点に、このギタリストの非凡さを見る思いがする。ジャンゴの音楽は、固らずも民族の伝統と音楽の革新、そして何よりも彼の強烈な個性が共存するものであったように思う。

ジャンゴ・ラインハルトが亡くなって間もなく、モダン・ジャズ・カルテット (MJQ) のジョン・ルイスがトリビュート曲「ジャンゴ」を54年に書いて彼を追悼したのを除けば、ジャンゴの名はジャズ・シーンにおいて、しばらく傍系の位置に甘んじていた。タル・ファーロウのプレイがジャンゴの影響を感じさせたり、ジョー・バスのアルバム「フォー・ジャンゴ」(64年)が制作されたことなどは、例外的と言ってよかった。ジャンゴへの

本格的な再評価が始まったのは、ジャズがその発展史にひと区切りつけた70年代半ばのことだったように思う。

ヨーロッパから、フィリップ・カテリーンやクリスチャン・エスクーデなど、ジャンゴの影響を強く受けつつ、それをコンテンポラリーなスタイルに取り入れようと試みるギタリストが登場する。やがてピエール・ブルール・フェレ、ピレリ・ラグレーンといったジブシー・コミュニティ出身のギター・アクトたちも、ジャズ・シーンのフロントで活躍。また、ジャンゴのオリジナル作品「ヌー・アージュ (雲)」、「ダフネ」、「マイナー・スウィング」などにも、ようやく注目が集まるようになっていく。

アメリカでは、むしろジャズ・シーンとは別の方向から、ジャンゴの音楽への注目が集まった歴史がある。ジャンゴのホット・クラブ5重奏団はギターとバイオリンによるスウィング・アンサンブルが看板だが、これらの楽器を常用するカントリー・ミュージックでは、30年代の後半からウエスタン・スウィングのブームが起こり、スウィング・ジャズのイデオロムが、次々に導入されていた時期だった。ジャンゴが渡米する時期までに、ジャンゴ＝グラッペリのスタイルは、すでにカントリーにかなり浸透していた形跡があって、例えばサンズ・オブ・ザ・バイオニアースは、アコースティック・ギター&フィドル (バイオリン) による、スウィンギーなアップ・テンポのかけ合いソロ・パートをフィーチャーしていたほどだったし、チェット・アトキンスやレス・ポール、ジェスロ・バーンズなど、ジャンゴの音楽を愛し、影響を受けてきたカントリー・ミュージシャンは思いの外多い。

受け継がれるジャンゴの魂

60年代末のサンフランシスコでは、当地のロック・シーンのカリスマ、グレイトフル・デッドのジェリー・ガルシアがジャンゴ・ラインハルトの名をあげたことから、市内と周辺のレコード店で一舟にジャンゴのアルバムが品切れするという事態が起こったことがある。サンフランシスコにはジャンゴを評価する気運が確かにあり、近年、人気が再燃しているダン・ヒックス&ザ・ホット・リックスも、アコースティック・ギターとバイオリンをフィーチャーしたユニークなスウィング・アクトであり、そのスタイルは明らかにジャンゴ＝グラッペリのそれを模したことを認めている。

ジェリー・ガルシアと親交の深かった、これもサンフランシスコのデヴィッド・グリスマンは、ジャンゴのジブシー・スウィングの色濃いオリジナルなインストルメンタル音楽「ドゥー・ミュージック」を編み出し、自身のマンドリン、ギター、バイオリンを中心とするアコースティック・アンサンブルのクインテットを76年に結成している。ジャンゴの流れを汲むジブシー・スウィングの他、ブルーグラスやショーロ、クレズマーなどの要素を含む、エスニックにしてモダンで洗練されたスタイルを作り上げた点では、ジャンゴ自身のかつてのアプローチにも通じているだろう。79年にはこのクインテットにステファン・グラッペリをゲストに迎えてツアーし、自身のスタイルを広めるとともに、そのグラッペリとともに映画『キング・オブ・ジブシーズ』の音楽を担当。グリスマンはこうした一連の精力的な活動で、ジャンゴ再評価の気運を一気に高めた。

グリスマンはもともとブルーグラス出身で、ロック・セッションもこなすバーサタイルなマンド